

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(21) : 開口具1

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	291
ページ	58-60
発行年	2005-06-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5196

無|縦|横

タテとヨコの 色とかたち のフィールドワーク

吉本 忍

開口具1

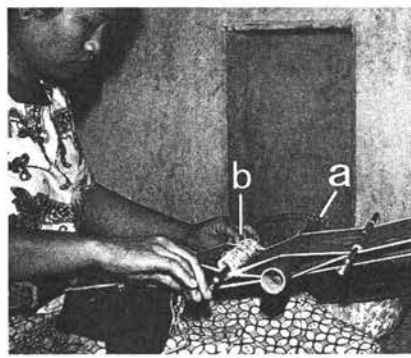


写真1 開口保持具と
輪状綜絢をともなった
機による織り(イ
ンドネシア、バリ島、
トングガナン村・19
81年) a-開口保持
具、b-輪状綜絢



写真2 番目綜絢をともなった高機による機織り(トルコ、シャンルウルファ:2003年)

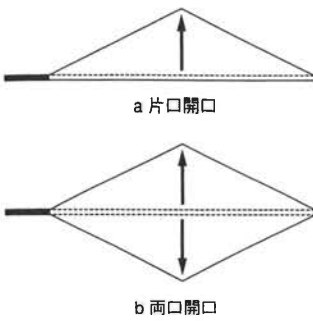


図1 タテ糸の開口形態

一昨年の7月号(268号)から連載をはじめ、これまでにはタテ糸の整経方式、異形の織物、タテ糸の張力と織機の型式について紹介してきた。そうしたなかでは、われわれが常識的に理解してきた織物や織機が、世界の常識と大きくかけ離れたものであるということとを説明してきた。それらの連載記事のもとになってきているデータの多くは、1970年からインドネシアのティモール島を皮切りとしてはじめたフィールドワークにおいて入手してきた。ティモール島で輪状の織物と出会って以来、36年という歳月のあいだ、わたしはテキスタイルを中核とした研究をつづけるな

かで、とりわけ織物を織るための道具である織機とその技術に興味を持ちつづけている。その経緯については、これまでも断片的に述べてきたが、世界各地を走りまわりながら、わたしなりに理解してきたことは、人類がその歴史のなかで製作し、使用してきたさまざまな道具のうちで、織機は傑出した道具であることと、織物を織るという技術が人類史の黎明期から現代に至るまで、人類が創造してきた文明や文化の中枢技術として君臨しつづけているということである。

織機が多岐にわたる道具のなかで傑出した道具であるということの要点は、織機が新石器時代から現代に至るまで使いつづけられていること、織機が世界の広範な地域において使われてきたこと、織機がきわめて複雑な構造をそなえていることの3点であり、これらの特徴を兼ねそなえた道具は他に類例を見ない。

また、織物を織るという技術が人類史における中枢技術でありつづけていることについては、その技術が新石器時代以来、人類にとっての主要な生活技術のひとつであること、現代文明の根幹にある科学技術の進歩が木綿布の大量生産を契機とした産業革命に依って

いること、現在、日進月歩の勢いで進行しているIT革命の原点に織機(ジャカード織機)から発展的に出現したコンピューターの発明があることの3点が要点となっている。したがって、このような織機とその技術についてのわたしの理解は、文化人類学(民族学)における人類の通文化的、かつ通史的な比較研究の対象としてきわめて有効であるということに直結しており、このことがわたしの織機研究の基本にある。

さて、この連載では、こしばらくつづけてきたタテ糸の張力と織機の型式についてのシリーズにひとくぎりがついている。そうしたことから、今月号からあらたに織機の主要構成部品のひとつである開口具をテーマとしたシリーズをはじめめる。まず、その冒頭にあたって、今月号では開口具の概要を紹介しておく。

開口具とはなにか

開口具は、タテ糸のあいだにヨコ糸を通すための空間をつくりだすための道具である。その機能をよりくわしく説明するならば、基本的には奇数列と偶数列のタテ糸の位置関係を交互に一括変換するということであり、そうしてつくりだされた空間(開口部と逆開口部)に、そのつどヨコ糸が通されて機織り作業が進行する。また、タテ糸の位置関係を交互に一括変換するということについては、具体的にいえば、タテ糸が水平方向に張りわたされているばあい、奇数列のタテ糸が上糸、偶数列のタテ糸が下糸となって開口している状態から、奇数列のタテ糸が下糸、偶数列のタテ糸が上糸となるように逆開口させるといふことである。このようなタテ糸の開口と逆

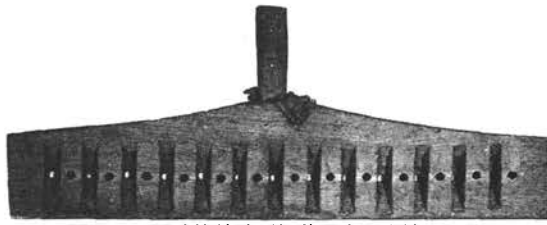


写真4 開孔棒綜統 (福井県立歴史博物館蔵)

開口は、機織りの基本運動（開口運動、緯入運動、緯打運動）のひとつである開口運動にあたるもので、開口具はその運動をつかさどる織機の重要な部品としての役割を担っている。

なお、織物を発達史的な視点からとらえてみると、原初的には編物のカテゴリーに包括されていたと考えられる。ただし、織物はその黎明期において、飛躍的な生産性の向上を可能とした開口具の出現（発明）が契機となって編物のカテゴリーから飛び出し、あらたに織物という独自のカテゴリーを構築したと考えられる。比喩的な表現をするならば、織物の本家は編物であり、織物は編物から派生した分家といえることができる。また、分家である織物は、開口具をはじめとする部品で構成される織機という生産性にすぐれた道具を

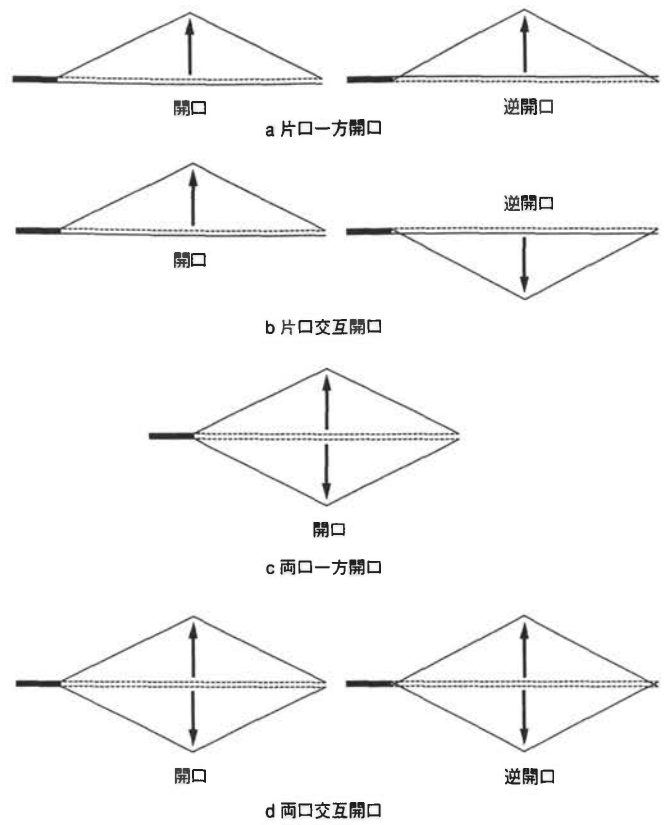


図2 開口具の開口機能

開口運動の基本

開口具には後述するように、さまざまな種類がある。ここではまず、それらの開口具についての理解を容易にするために、開口具を使用しておこなわれる開口と逆開口という開口運動の基本となる、タテ糸の開口形態と開口具の開口機能を紹介する。

タテ糸の開口形態

開口具によってタテ糸が開口、あるいは逆開口したばあいのタテ糸の開口形態については、左記のような片口開口と両口開口という2種類がある。

- ・片口開口—奇数列のタテ糸と偶数列のタテ糸のいずれかが、一方方向に引き離された状態の空間が、タテ糸の開口部、あるいは逆開口部を構成しているばあいのタテ糸の開口形態。(図1-a)

- ・両口開口—奇数列のタテ糸と偶数列のタテ糸が、同時に正逆2方向に引き離された状態の空間が、タテ糸の開口部、あるいは逆開口部を構成しているばあいのタテ糸の開口形態。(図1-b)

開口具の開口機能

開口具自体にそなわっているタテ糸の開口機能については、下記のような、片口一方開口、片口交互開口、両口一方開口、両口交互開口という4種類がある。

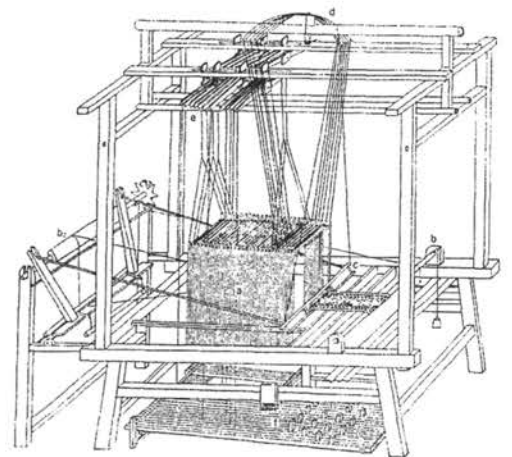


図3 擬定番目綜統をともなった中国の「多綜多躡紋織機」(『中国科学紡織技術史』(古代部分)より)

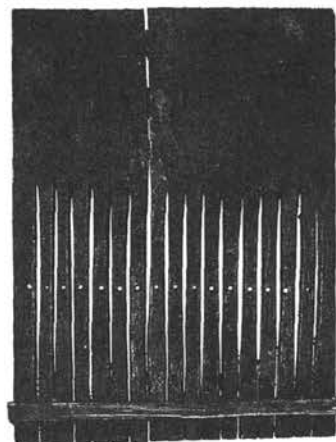


写真3 開孔板綜統 (津南町歴史民俗資料館蔵)

- ・片口交互開口—奇数列のタテ糸と偶数列のタテ糸のいずれかを、正逆2方向に交互に片口開口させることによって、タテ糸の開口を併用する。(図2-a)

- ・片口一方開口—奇数列のタテ糸と偶数列のタテ糸のいずれかを一方方向に引き離し、片口開口させることによって、タテ糸を開口、あるいは逆開口させる機能。このような開口機能をそなえた開口具によってタテ糸の開口と逆開口をおこなうためには、同じ機能をそなえた2つの開口具を交互に使うか、両口一方開口機能をそなえた開口具を併用する。(図2-a)

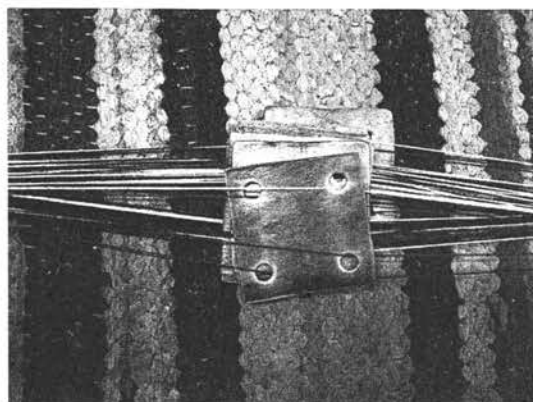


写真5 回転板綜統 (シリア、ダマスカス：2003年)

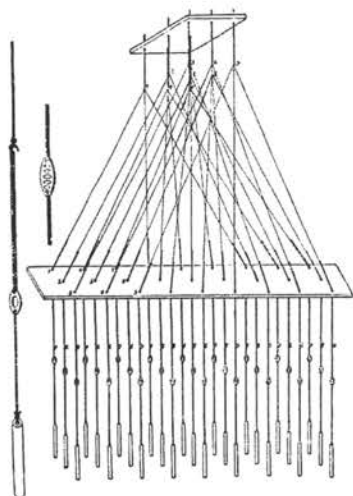


図5 通糸綜統
("The Book of Looms"より)



図4 回転棒綜統

さまざまな開口具

タテ糸を同時に正逆2方向に交互に両口開口させることによって、タテ糸の開口と逆開口を交互に繰り返す機能。(図2・d)

開口具にはさまざまな種類がある。それらは大別すると開口保持具と綜統に分類され、綜統のうちには、輪状綜統、番目綜統、擬似番目綜統、開孔板綜統、開孔棒綜統、回転板綜統、回転棒綜統、通糸綜統の8種類がある。以下は個別の開口具の基本的な機能と構造の概略であり、その詳細については来月号から順次紹介する。

開口保持具—両口一方開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は両口開口となる。タテ糸の開口と逆開口を繰り返しおこなうためには、輪状綜統が併用されてきた。(写真1・a)

輪状綜統—輪状の綜統糸によって構成された綜統。片口一方開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は片口開口となる。タテ糸の開口と逆開口を繰り返しおこなうためには、2つの輪状綜統を使用するばあいと、開口保持具を併用するばあいがある。(写真1・b)

番目綜統—番目状を呈した綜統糸によって構成された綜統。片口交互開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は片口開口となる。1枚のみでタテ糸の開口と逆開口を繰り返しおこなうことができるが、実際の使用状況においては、2枚1組の使用例のみを確認している。(写真2)

擬似番目綜統—番目状を呈した綜統糸によって構成された綜統。片口一方開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は片口開口となる。タテ糸の開口と逆開口を繰り返しおこなうためには、2枚1組の擬似番目綜統が使われてきた。(図3)

開孔板綜統—細長い孔と丸い孔が交互にあけられた板状の綜統。片口交互開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は片口開口となる。(写真3)

開孔棒綜統—断面が漏斗型を呈した孔が交互に向きをかえてあけられた棒状の綜統。両口交互開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は両口開口となる。(写真4)

回転板綜統—孔のあいた複数枚の板状の綜統。両口交互開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は両口開口となる。(写真5)

回転棒綜統—丸い棒の胴体に正逆2方向から深い溝が刻まれた綜統。両口交互開口機能をそなえており、タテ糸の開口形態は両口開口となる。(図4)

通糸綜統—通糸と呼ばれる綜統糸によって構成された綜統。片口一方開口機能をそなえているばあいと片口交互開口機能をそなえているばあいがあり、タテ糸の開口形態は片口開口となる。(図5)

(国立民族学博物館 民族文化研究所 教授)

よしもと・しのぶ

文献

BROUDY, E.

1976年 *The Book of Looms*.

New York, Cincinnati, Toronto, London, Melbourne:

Van Nostrand Reinhold Company.

陳 維稷(編)

1984年『中国紡織科学技術史』(古代部分) 北

京・科学出版社。

吉本 忍

1987年『手織機の構造・機能論的分析と分類』

『国立民族学博物館研究報告』12巻2号。